

Weltalter の研究動向とマルクス・ガブリエルのシェリング研究

長 島 隆

本稿では、1811 年から 1815 年ごろにシェリングが取り組んだ Weltalter の研究の現状について明らかにしたうえで、マルクス・ガブリエルのシェリング研究がどのような意味を持つのかを明らかにすることを課題とする。そのさい、とりわけガブリエル自身が執筆している後期シェリング研究についての解明¹を参考にしながら明らかにしていくことにしたい。

1. シェリング研究の動向と Weltalter 研究の位置

ガブリエルの動向論文（注 1 参照）自身が、最近刊行された 7 つのシェリング研究書についての書評とその位置付けを行おうとする論文である。その際、彼は Walter Schulz の『シェリングの後期哲学におけるドイツ観念論の完成』²を重要な、豊かな影響を与えた論文であると評価して、それを継承したのが Manfred Frank の『存在の欠如。シェリングのヘーゲル批判とマルクス弁証法の端緒』³であることを指摘する。

1) 私もすでに指摘してきたように、シェリング研究は 3 つの傾向に分かれていた。第 1 に、マルクス主義的研究の方向であり、ハインリッヒ・ハイネの「ドイツにおける哲学と宗教」、エンゲルスの 3 つの「反シェリング論」、マルクスの「聖家族」における指摘をうけて、ジョルジュ・ルカーチの『理性の破壊』において頂点に達し、現代ではゲルト・イルリッツの『理性の要求』が継承した⁴。それにたいして第 2 の研究方向が、実存主義的研究の方向である。これ

¹ Markus Gabriel, *Sein, Mensch, Bewußtsein. Tendenzen der neueren Forschung zur Spätphilosophie Schellings*, in: *Philosophische Rundschau*, Bd.52(2005), S.271-301.

² Schulz, Walter, *Die Vollendung des Deutschen Idealismus in der Spätphilosophie Schellings*, Stuttgart: Kohlhammer, 1954.

³ Manfred Frank, *Der Mangel an Sein. Schellings Hegelkritik und die Anfänge der Marxschen Dialektik*, F.a.M. 1975(2.Auflage, 1992).なお、第 2 版には長い序論がサルトル論として付加された。

⁴ これらはすべて邦訳がある。つい最近まで実存主義的シェリング研究は邦訳がなかったが最近相次いで邦訳された。したがって、現在では日本語で基本的翻訳は読めるようになった。長島編「日本語で読めるシェリング文献」『講座 ドイツ観念論 第 4 巻 自由と自然の深淵』弘文堂、1990 年。その後の研究状況については、「シェリング年報」に文献目録が掲載されている。

は、ほぼ3つの研究によって代表される。すなわち、ハイデッガーの「自由論」研究であり、ヤスパースの『シェリング、偉大さとその運命』⁵そして Walter Schulz の前記著作である。第3の研究方向は、まさに通説的な研究であり、19世紀において成立したヘーゲル中央派による哲学的な位置づけである。「カントからヘーゲルへと至る過渡的位置づけ」がシェリングとフィヒテに与えられた哲学史的な位置である。だから、リヒャルト・クローナーの『ドイツ観念論の発展—カントからヘーゲルまで』⁶、ニコライ・ハルトマン『ドイツ観念論の哲学』⁷、クローナー・フィッシャー、エルトマン等の哲学史がこの流れをつくったと言えるだろう。

1970年以後、第3の流れを覆す研究が中心になってきた。その中心はやはり、1954年以来開始されたシェリングの新版全集の編集である。第1と第2の流れが焦点としていたのが「後期シェリング」であり、2つの方向はその対立的な理解である。この対立は「非合理主義の淵源」としてのシェリングと「実存主義の源泉」としてのシェリングの対立である。その際後期シェリングの「神智学的傾向に陥った」ことを問題にしており、それをどう評価するかが対立的に理解されたのである。

だが、問題はこのシュルツの研究にあり、第2の流れに入れているけれども、これは「実存主義」的研究にとどまらず、むしろそれを超えた研究の内容を指示していたのである。まさにこの研究は、ガブリエルも指摘するように、後期におけるシェリングのヘーゲル批判を問題にし、そこにシェリングの現代的可能性を見る。後期シェリングの中心に立つテーゼはまさに「一体なぜ理性が存在するのか、なぜ非理性が存在しないのか」というテーゼである。ヘーゲルが自己定立としての自由を「絶対的自己媒介」の端緒として捉えた。それにたいしてシェリングは、「自分自身を基礎づける主観性という主観性のパラダイム」を引き受け観念論的な構想に統合しようとする。シュルツはシェリングが「媒介された自己媒介」という思想形態を絶対的主観性のかわりに置いたことを指摘する。

ガブリエルによれば、このシュルツの仕事を継承したのがマンフレート・フランクの『存在の欠如。シェリングのヘーゲル批判とマルクス弁証法の端緒』であった。フランクが示したのは、「シェリングの洞察がヘーゲルの存在の本質への解消にたいする批判として再構成される」ことである。その際ヘーゲルは「存在を本質の前提構造に埋め込み、概念に残余なく転換しよう」と試みたと理解される。

⁵ Jaspers, Karl, *Schelling: Größe und Verhängnis*, Piper Verlag, 1954. 邦訳『ヤスパース』（那須、山本、高橋訳）行人社、2006年。

⁶ 上妻精他訳、理想社、1999年。

⁷ 村岡晋一他訳、作品社、2004年。

このようにシェリングの独自性を主張し、ドイツ観念論の可能性を捉えなおす試みは、最近ヴォルフガング・ヤンケの『ドイツ観念論の三重の完成。シェリング、ヘーゲルそしてフィヒテの書かれざる学説』(2009 年)⁸によってさらに展開され、ドイツ観念論の3つの道として示された。これによって、70 年代以後部分的に示されてきた、シェリングが初めからフィヒテから独立的地位を占めるという主張を始め、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルの哲学的動向がはっきりと「哲学運動」であることが明らかになった。『純粹理性批判』によるカントの超越論哲学の提起以来のドイツ観念論の運動は、まさにその諸側面へと展開し、哲学の深部にまでその問題提起が浸透し、その土台をつくり返す運動として展開されたことを示す。この点で、重要なプロジェクトは、本稿の枠組みを超えるけれども、指摘しておく必要があるだろう。すなわち、ディーター・ヘンリッヒが主導した「コンステラチオン・プロジェクト」⁹と、シュテフェン・ディーチュラによる、カントの影響下におけるカントの受容の追跡研究である¹⁰。これらはまさにカントの提起の広がりを極めて大きく捉え、ドイツ観念論の運動のダイナミズムを示してくれる。またヘンリッヒのプロジェクトから生まれたヘルダーリンにたいする着目は、ヘルダーリン研究として結実し、さらにヘルダーリン研究の成果も挙げられている¹¹ことを指摘しておく。これらの「ドイツ観念論の運動」を見てくると、カントによる「哲学革命」すなわち、カントの『純粹理性批判』に始まる批判主義による「超越論哲学」こそが、哲学の全領域に浸透し、哲学の前提を全面的に覆し新しい基盤を形成していく、新しい時代の思想的形成の姿を見ることができる。

2) さて、以上の動きの中で、シェリングの研究もまた、1つの転回を示した。それはいわゆる「消極哲学」へのプラトン研究の導入の問題である。シェリングの初期におけるプラトンを発見するのは、まさにシェリング・コミッションによる「歴史的-批判版」の編集の重要な成果である。すなわち、「ティマイオス評釈」が編集され、刊行されたことである。

⁸ Wolfgang Janke, *Die dreifache Vollendung des Deutschen Idealismus. Schelling, Hegel und Fichtes ungeschriebene Lehre* (Fichte-Studien, Supplementa), Amsterdam/New York: Rodopi, 2009.

⁹ Henrich, Dieter, *Konstellationen. Probleme und Debatten am Ursprung der idealistischen Philosophie (1789-1795)*, Stuttgart: Klett-Cotta, 1991.

¹⁰ Steffen Dietzsch, *Dimensionen der Transzendentalphilosophie 1780-1810*, Berlin: Akademie Verlag, 1992. 邦訳『超越論哲学の次元 1780-1810』(長島隆・渋谷繁明訳)、知泉書館、2013 年。

¹¹ Henrich, Dieter, *Der Gang des Andenkens. Beobachtungen zu Hölderlins Gedicht*. Stuttgart 1986; ders., *Der Grund im Bewußtsein. Untersuchungen zu Hölderlins Denken (1794/95)*. Stuttgart: Klett-Cotta, 1992. そして、ヘルダーリンについては、Jamme, Christoph & Völkel, Frank, *Hölderlin und der deutsche Idealismus*, 4Bde. が Frommann-Holzboog Verlag から 2005 年に刊行されている。

もちろん、初期シェリングにおいて「プラトンの傾向」が存在することはすでにこの発見以前にも指摘されていた。すなわち、重要なものとしてはハラルド・ホルツの研究とバイアーヴァルテスの研究を挙げておこう¹²。彼らの研究はこの「ティマイオス評釈」の刊行以前のものであり、まさにシェリング研究にとって、その理論分析からの問題提起であった。ホルツの研究は、初期シェリングの哲学的営みの背景としてプラトンを指摘したものであり、バイアーヴァルテスは、とりわけ、シェリングにおける新プラトン主義の問題を提起したものである。したがって、彼らの研究は文献的には確証できなかったわけであるが、極めて精緻な分析をしていたことが改めて思い出される。

このプラトン受容は、ガブリエルによれば、次のように理解されている。

「ヴァルター・シュルツとマンフレート・フランクのプログラムの進路を示す仕事はシェリングの後期哲学が総じて観念論的理性概念の変容を前提し、この変容が存在概念の様相を内在するという洞察を共有する。形而上学的實在論のもとに、現実性の真の存在が原理的にまた解明されえないというテーゼが理解されるなら、プラトンによって、結局はパルメニデスによって残された、存在と思惟の同一化すなわち規定性が形而上学的實在論のそれぞれの形式にたいして無条件に限界づけることが見られる。存在が認識可能であるとすれば、存在はまた完全に認識可能でなければならない。」¹³

このシェリングによるプラトン受容は、「ティマイオス評釈」についての論文の執筆者において基本的に一致していると言えるだろう。筆者が知る限り、最初にこれについて言及し、分析したのは、ビルギット・ザントカウレン¹⁴である。彼女は、「ティマイオス評釈」の刊行以前に草稿を見てこれを書き、このテキストの理解がカント超越論哲学の枠組みでのプラトン受容であることを指摘している。実際、シェリングがこの「ティマイオス評釈」（シェリングのノートであるが、したがってノートを取りながら学んでいたと言った方がよいかもしれない）を

¹² Holz, Harald, Das Platonische Syndrom beim jungen Schelling(Hintergrundtheoreme in der Ausbildung seines Naturbegriffs), in: *Die Idee der Philosophie bei Schelling. Metaphysische Motive in seiner Frühphilosophie*, Freiburg-München: Verlag Karl Alber, 1977, S.19-63.なお、バイアーヴァルテスのものとしては次の3つを挙げておく。Beierwaltes, Werner, *Platonismus und Idealismus*, F.a.M: Vittorio Klostermann, 1972.; ders., *Identität und Differenz*, F.a.M: Vittorio Klostermann, 2002(1. Auflage, 1980); ders.(Hrsg. und Einleitung), F.W.J.Schelling, *Texte zur Kunstphilosophie*, Ditzingen: Reclam, 1986. 後期を視野に入れてはいけれどもバイアーヴァルテスの研究は同一性哲学の時期に集中している。

¹³ Gabriel[2005]S.273.

¹⁴ Birgitt-Sandkaulen-Bock, *Ausgang vom Unbedingten*, Göttingen: Vandenhoeck& Ruprecht, 1990

論文

執筆していた時期は、まさにカントの研究をしていた時期であり、基本的にこのような傾向を賛成することができる。この後、クリングスの解説論文があり、基本的に同一方向の議論である。その後、この「ティマイオス評釈」はフランスにおける翻訳、さらに、イタリア語の翻訳が刊行されている¹⁵。

リューディガー・ブープナー¹⁶も、「ティマイオス評釈」が公刊された直後、シェリングの自然哲学にたいするその意義について自然哲学がフィヒテとの対決から登場するのではなく、カント哲学をプラトンから必然的に補完することとして現れることを指摘し、後期シェリングの神話論もまたプラトンからの再構成として理解されるべきだと指摘することになる。ガブリエルはまさにブープナーの議論をこう要約しながら、プラトンとカントがシェリングを貫通する2つの線であることをブープナーが指摘していることを見ている。「ティマイオス評釈」については現在のところこれらの論文が指摘する方向が基本的な了解であるだろう。

そして、今後いわゆる「消極哲学」の研究にとって、このプラトンの契機は無視することができないであろう。実際のところ、筆者は、加えて「マルキオン論文」¹⁷に注目している。この論文もまたまさにカント批判主義の線上で、マルキオンのグノーシス的傾向、そしてネオプラトン主義的傾向を問題にする。すなわち、カント的—批判主義的契機とプラトン—ネオプラトンの契機の媒介こそがシェリングの試みであるとすれば、まさにその後のさまざまな契機もまた十分明晰に理解することができるからである。この時期のシェリングの著作執筆時期を検討すれば、

1792 年 「悪の起源」論

1793 年 「神話」論

1794 年 「ティマイオス評釈」、「可能性」論文

1795 年 「自我」論文、「書簡」論文、「マルキオン」論文

¹⁵ F.W.J.Schelling, „*Timaeus*“ (1794), Hrsg. von Hartmut Buchner mit einem Beitrag von Hermann Krings: Genesis und Materie. Zur Bedeutung der „*Timaeus*“- Handschrift für Schellings Naturphilosophie (Schellingiana, Bd.4), Stuttgart-Cannstatt: fommamm-holzboog, 1994; F. W. J. Schelling, *Le Timée de Platon*, Traduit et présenté par Alexandra Michalewski, Presses Universitaires du Septentrion, 2005; F.W.J. Schelling, *Timaeus* introduzione di Francesco Moiso, Guerini E Associati, 1995. モイザーのイタリア語への翻訳は、ドイツ語のオリジナル版の1年後であり、極めて早い時期に刊行されている。この点はイタリアのシェリング研究がすでに歴史的にもシェリング受容の点でも独自の動きを示しながらドイツのシェリング・コミッションと連携していることを示す。

¹⁶ Bubner, Rüdiger, Die Entdeckung Platons durch Schelling, in: *Neue Hefte für Philosophie*, Göttingen: Vandenhosck&Ruprecht, 1995, No.35, S.32-55.

¹⁷ Fridericus Guilielmus Josephus Schelling, *De Marcione Paullinarum Epistolarum Emendatore*, Tübingen, 1795.

1796 年 「諸論文」、「理念」

以上のようになる。すなわち、この時期は、まさにカントを受容し、フィヒテに着目していた時期であり、1794 年から 1796 年までが「超越論哲学」の時期であり、自らの独自性を「自然哲学」に定め、その方向での最初の論考を発表する時期にあたる。したがって、「ティマイオス」評釈もまた、カント受容の線において捉えられることになる。その中で古代の存在論を復活させようとする試みがまさに「認識論」からその根拠として存在論を置こうとするのがシェリングの試みであると言えるだろう。もちろんこの試みでは新しい土台のもとで（すでに述べたように、カントによる「哲学革命」によってくつ返され新しく作り上げられた土台のもとで）行われるが故に、この存在論のあり方もまた変貌するのであるが。

実際この著作執筆時期を見ればわかるように、シェリングの「超越論哲学」への取り組みの時期に、「ディマイオス評釈」と「マルキオン」論文が書かれているのである。

このとき、私が「マルキオン」論文に注目するのは、まさに「古代の存在論」の理解にかかわるからである。マルキオンはあまり(キリスト教にかかわらない我々にとっては)知られていないけれども、2 世紀のキリスト教徒であり、最初に正典の整理を行ったとされる人物である。そのさい、パウロ書簡を重視し、イエスの救世主であることを否定したとされ、教会から追放された。護教家たちの批判を受けることになる。とりわけテルトリアヌスの「マルキオン論駁」は重要なものとされる。マルキオンの思想は「グノーシス」の影響を受けていることが指摘される。

シェリングの「マルキオン」論文もまた、この「グノーシス」の問題を浮かび上がらせる。すなわち、シェリングの「古代哲学」はまさにプラトン、アリストテレスから新プラトン主義にまで広がっていると言えるだろう。だから、バイアーヴァルテスの研究はこの問題について重要なものであり、しかもこの研究が「同一性」哲学の時期を対象にしていることについても考慮すべきである。実際、シェリングの思想展開の中で、自然哲学を経て同一性哲学に転回する中で、次第に、この「古代哲学」の存在論の問題は大きくなっていく。とりわけ Weltalter の時代においてこの問題の重要性は浮かび上がる。今回のシンポジウム（本別冊第 2 部参照）において小野純一氏がユダヤ教カバラの背景にある(最近の中世哲学研究の 1 つの中心的傾向である)アラビア哲学の側から Weltalter の中心概念のひとつである「収縮」の問題を比較検討しているのは、まさにこの初期からのシェリングの理解からすれば、「中期」―「後期」哲学への 1 つの問題提起であると言えるだろう。また永井晋氏の議論はユダヤ教カバラとシェリングの議論を検討の対象としたものであり、重要な方向を示すと思われる。

岡村康夫氏の議論はまさに岡村氏が長年取り組んできたヤーコプ・ベームからシェリングの Weltalter の理論構造を解析したものであり、そこには先の 2 人と共有するものがあると言わ

ねばならない。菅原潤氏の議論はシェリングの Weltalter に内在しながら、Weltalter の理論的問題を摘出したものである。

まさに Weltalter は最初期のシェリングの試み、そして自然哲学、同一性哲学を貫通し、それぞれの時期にそれぞれの独自性を持ちながら、カントの超越論哲学を土台にして、その射程をどこまで伸ばすことができるかという試みを集中的に展開して見せたものだと言えるのではないか。

2. Weltalter 研究の現段階

さて、次に Weltalter の研究の現段階を、その資料の刊行にそくして明らかにしておきたい。現在は Weltalter にかんする資料が極めて多く刊行され、われわれ自身がかなり精力的に読むことを要求されているからである。次に研究状況を3つの段階に分けて検討するつもりである。

1) Weltalter 草稿の刊行状況

周知のように、シェリングの死後息子の Karl Friedrich が整理して全集を刊行した際に(1856-1861)、Weltalter の草稿を収録したことによって知られるようになった。

その後、シェリング著作集としてこの Weltalter の2つの草稿を収録した補巻をつけてマンフレート・シュレーターによって、ファクシミリ版で刊行されたことによって研究の機運は高まったと言えよう。

- ① Die Weltalter(1813), in: *Sämmtliche Werke*, Bd.VIII, S.197-344.

これは Druck III と呼ばれるものであり、草稿では3番目のものである。これが次の2つにたいして最後の修正稿である。1861年に刊行された。

- ② Die Weltalter Druck I(1811), in: *Schellings Werke, Nachlaßband*.hrsg. von Schröter, Manfred, München: C.H.Beck,1946,S.3-107.

- ③ Die Weltalter Druck II(1813), in: *Schellings Werke, Nachlaßband*.hrsg. von Schröter, Manfred,S.111-184.

この3つの印刷稿(Druck)がWeltalterの基本テキストとすることができるだろう。Druck IIIはシェリングの息子によって、1861年に刊行された。彼が編集したオリジナル版全集第8巻で発表されたのである。1813年というのは印刷された時期であり、それをシェリングが朱を入れて完成したものにしたのは、さらに「1814(あるいは1815年)」と特定されている。②、③を公表したシュレーターも引用しているこの箇所を紹介しておこう。

「それは、かつて長く待ち望まれた作品の最初の部分である。それについて多くのボーゲ

ンはすでに 1811 年の終わりに、再び 1813 年に印刷されている。ここで刊行されたものはおそらく 1814 年（あるいは 1815 年）に由来し、Weltalter のこの部分のさまざまな加工のもとでもっとも完全なものである。この草稿がシェリングの論文の中に現存したのである」(SW VIII, V)。

シュレーターによる②、③の刊行の前に、実はもう 1 つ刊行されている。

④ *Die Weltalter*, hrsg. von Kuhlenbeck, Ludwig, Reclam, 1913.

236 ページのものである。私はこれを見ていない。だから、この版が、息子版を文庫用に編集しなおしたものであるか、あるいは新しいものを文庫として刊行したのかどうかはわからない。書誌的事項を紹介するだけである。

それにしても、第三印刷稿の刊行後シュレーターの刊行まで 85 年の空隙があり、④がその間に、52 年後に刊行されていることは重要である。Weltalter の言葉が、意外に普及していたことがよくわかる状況を前提しながら¹⁸われわれにとってはシェリングの Weltalter の全貌が見ることができなかったのである。なかんずく、1944 年 7 月 11, 12, 13 日の空襲によってシェリングのミュンヘン遺稿(大学図書館の地下倉庫に保存されていた)は灰燼に帰した。だから、シュレーターはフーアマンズの戦前の報告の重要性を指摘する。すなわち、フーアマンズは 1940 年の「シェリングの最後の哲学。後期観念論の開始における消極哲学と積極哲学」の紹介である。

そしてシュレーターは、1804 年の「哲学と宗教」、1806 年の「自然哲学序論へのアフォリスメン」をへて、1809 年の「人間的自由の本質」を経て 1810 年の「シュトゥットガルト私講義」を Weltalter に先行する重要なシェリングの著作であることを指摘する。

シュレーターの「編集者の序論」は、これらの 3 つの印刷稿のテキストの分析を行っており、必読であると言えよう。

⑤ Siegbert Peez(Hrsg. und eingeleitet), *F.W.J.Schelling, System der Weltalter*, F.a.M.: Vittorio

¹⁸ Weltalter の使用は例えば、ロマン主義の思想家の中で使われている。ノヴァーリス、あるいはシュレーゲルも使用していることを指摘しておく。ノヴァーリスの *Ofterdingen*, あるいはシュレーゲルの草稿である。またフランツ・バーダー (Franz Baader, 1765-1841) にも『Weltalter』(1858 年)という作品があるが、これは、執筆時期はもっと早いころからのものをまとめたものであり、実際死後に刊行されたものである。そのため更にグリム辞典(*Deutsches Wörterbuch von Jacob und Wilhelm Grimm*, Bd.28, S.1526-1528)では、①Zeitalter という意味と②「特定の世界史的時代段階に指標」に分けられるという。彼らの説明では、Schelling の名前を挙げるとともに、それ以前の使用例として、J.Balde の作品(1658 年)、J.Grob の詩(1678 年)などを挙げるとともに、Lichtenberg の 1800 年の論文集なども挙げている。ここでは、それらを検討することは不可能であるが、これらもまた視野に入れる必要があると思われる。

Klostermann,1990.

これは、当時は新進のペーツが編集して序論を書いている。いわゆる聴講者の Ernst von Lasaulx の「講義筆記録」である。1827・28 年冬学期のミュンヘン講義である。シェリングで「講義筆記録」は珍しいと思われる。これは講義筆記録では最初のものであろう。この講義自身は、Das System der Weltalter」という題目を持って告知されたものであり、実際に 11 月 26 日に始められ、この講義は Weltalter については初めての講義であった。ペーツによれば、この講義は、5 つの部分に分かれている。第 1 部（第 1 講義から第 5 講義まで）で、シェリングは「哲学の概念」を展開し、諸体系の連続という現象を示すが、キリスト教的教説を指示することによって、「神の歴史性」と時間性を問題にする。したがって、この議論の帰結として哲学に新しい課題を要請することになる。第 1 に、学としての哲学の性格の変更、第 2 に、知の概念の変更、第 3 に、体系概念の変更、第 4 に変更された体系概念には叙述の変更された方法が対応する。この 4 点をシェリングは要求する。

第 2 部（第 6 講義から第 14 講義まで）では、シェリングは、いわゆる「近代の哲学の歴史」を展開し、デカルト以来の神の論理的概念にその誤謬を見ることになり、ヘーゲルの哲学史と共有する 2 つの概念を指摘する。すなわち、哲学史は取り扱われるべき事柄そのものの展開であること。およびこの展開が、シェリングによれば、彼の固有の観点、積極哲学において頂点に達することである。

第 3 部（第 15 講義から第 23 講義まで）では、後に「哲学的経験論の叙述」として展開されるものであるが、第 2 部での歴史的展開にたいする体系的展開を目指した部分である。ペーツは、ここに「積極哲学の前史にして予備作業」と位置づけられる「ヤコービの信仰哲学の新しい価値づけ」が含まれているのは驚くべきことであると述べている。なお、第 20 講義において、「論理学」から「自然哲学」への移行の問題において、ヘーゲルが「決断」を問題にしたことにシェリングが言及していることをペーツは指摘しており、この講義はまさにドイツ観念論の到達点を示すものになっている。

第 4 部（第 24 講義から第 30 講義まで）は、積極哲学の第 1 部で、創造神の理論でその高点を獲得することを指摘する。

第 5 部と最後の部分（第 31 講義から第 44 講義まで）では、この構想に含まれた、さまざまな体系的含意である。

ペーツは以上のようにこの講義の解説を行っている。

- ⑥ F.W.J.Schelling, *Weltalter-Fragmente*(Schellingiana 13.1,2), hrsg. von Klaus Grotzsch Mit einer Einleitung von Wilhelm Schmidt-Biggemann, Stuttgart- Cannstatt: fromman-holzboog,2002.

この書につけられた序論は、その影響史を簡潔に分析しており、われわれが錯綜するテキストにたいして介入する際の見取り図を与えてくれるように思われる¹⁹。

くわえて、現在刊行中の次のものは研究を刷新する可能性を含んでいる。

⑦ F.W.J. Schelling, *Philosophische Entwürfe und Tagebücher*, Felix Meiner.

ここでは、刊行年をつけない形で表記しているのは、以下で述べるようにいわゆる「刊行中」であるからである。膨大な未整理のシェリングの手稿、日記、書簡の類がベルリンのアカデミーに残っている(「ベルリン遺稿」)ことはすでによく知られている。その整理の中心は、Schellingforschungsstelle zu Berlin であるが、それと並行して Brehmen のザントキューラーを中心として整理が進められていたことは知られていた。そのブレーメンのグループが刊行し始めているのがこれである。その「ベルリン遺稿」の中の「諸構想と日記」であり、18 巻が予定されている。4 巻(第 1 巻、第 2 巻、第 12 巻、第 14 巻)が、フェリックス・マイナー社から刊行されている。この後、残りがフロムマン・ホルツボーク社の出版社を移して刊行されることがすでに告知されている。この出版社の変更はいくつかの要因があると思われるが、その 1 つにはこの整理編集の中心になっていたザントキューラーの退職という事情もあると思われる。すでに刊行されている第 1 巻、第 2 巻は編者が Hans J. Sandkühler と Martin Schraven 及び Lothar Knatz であったが、第 14 巻はシュラーベンだけが編者として名前を挙げられている。今後、シュラーベンが中心となってこの刊行は続けられるようである。

Weltalter にかんしては、第 1 巻(1994 年)、第 2 巻(2002 年)が宛てられておりすでに刊行されている。しかも第 2 巻は「サモトラケの神々」であるから、おそらく「ベルリン遺稿」では、この 2 巻が該当するだろう。したがってほぼ Weltalter にかんする資料は出そろったと言えるかもしれない²⁰。

だが、講義筆記録にかんしては果たしてどの程度残っているだろうか。シェリングの場合、講義筆記録がヘーゲルの場合の筆記録と異なり、すでにいくつか息子版にも採録されている。それは、たしかに聴講者が筆記したものであるが、シェリングはそのままにして置かず、それシェリング自身が朱を入れて完成させたものであるからである。その意味で、シェリングは聴講者の誤解などをそのままにしておかないのである。

¹⁹ なお、「人間的自由の本質」のブーフハイムの編集したテキストにおけるブーフハイムの解説もまた、この解説と同様に我々が、この時期のテキストを読む上での見取り図となるので重要なものと思われる。

²⁰ 第 12 巻は 1946 年の日記、第 14 巻は 1948 年のものであり、これは 1948 年の革命期のものである。なお、ベルリン遺稿の中には 1809 年から 1854 年に亡くなるまでに 41 冊の日記(Kalendarien)が残っているという。

2) 翻訳書の問題

翻訳では、現在英訳が2つ、仏訳が3つある。まず英訳である。

- ⑧ *The Abyss of Freedom/Ages of the World*, An essay by Slavoi Zizek and the complete text of Schelling's *Die Weltalter*(second draft, 1813) in English translation by Judith Norman, the Michigan University Press, 1997.
- ⑨ F.W.J. Schelling, *The Ages of the World*, translated, with an introduction by Jason M. Wirth, State University of New York, 2000

前者は、第2印刷稿(Druck II)の英訳であり、後者は第3印刷稿(Druck III)の英訳である。翻訳にあたってのテキストの選択が面白い。今日の編集は19世紀の編集方針と異なって、初版を重視し、シェリングの始原的な発想を確定する作業を重視する方向がある。だが、シェリングのようにそれを自ら朱を入れ、さらに完成へ向けて努力し、それが挫折する作品が多いときに、どれを重視するかは議論が多いと思われる。だから、英訳のように、初版に着目するのではなく、そのできるだけ完成に近い形態を重視するのは、1つ検討を要するところだと思われる。そして、ヘーゲルのようにほぼ講義筆録が確定されている場合と異なっており、今なお膨大な草稿の整理の段階にあり全貌が分からない思想家の場合²¹、これは1つの見識であると思われる。ここでは、特に Druck II を取り上げた⑦からその選択の意味について、ジジエクの述べていることを紹介しておきたい。すでに、指摘されるように、Weltalter は、3つの Druck がすべて、「過去」、「現在」、「未来」という3つの部分を計画し、その第1部すなわち「過去」だけを含んでいる。そこからジジエクは次のように言っている。

「それらは、過去と現在の間の種別化の、すなわち運行の自己閉鎖的な回転運動から世界の発生の説明を与えるという決定的な点で中断させられている。しかしながら、それらのまさにその失敗において、3つの印刷稿は、論証できることであるが、ドイツ観念論の極点であり、同時にその輪郭が唯一ドイツ観念論の状態において識別できる知られない領域への飛躍(breakthrough)である。この飛躍は第2草稿において最も明白である。そしてこ

²¹ シェリングの性格に起因するものであると思われるが、彼が何回か行っている講義にかんしては、その聴取者の筆録に自分で朱を入れ直していることが確認される。そして、最後の「啓示の哲学」にかんしても、この講義筆録を無断で公表したパウルスに怒り、裁判沙汰にしていることは、考慮される必要があるだろう。Manfred Frank(Hrsg.u. eingel.), Schelling Philosophie der Offenbarung 1941/42, F.a.M.: Suhrkamp, 1977. フランクのこの書には、パウルスの「…ついに明らかになったシェリングの積極的啓示の哲学」という、この論争になったものが収録されている。加えてこの論争にかかわる文献を Anhang として収録している。

の理由で、本書における翻訳のために選択された」²²。

このような理解で、まさに「過去」から「現在」への飛躍という問題をドイツ観念論そのものの問題として捉えようとするジジェクの理解が示されている。そしてこのような理解は、すでに指摘したように、ペーツもまた言及しているのであるが、まさにヘーゲルが「論理学」から「実在哲学」への移行を、「創造以前の神の叙述」としての論理学から「決断」によって自然哲学へと移行することと相即する議論であると言えるだろう。この点の検討は重要な課題であると言えるだろう。今回の討論でも、「過去」から「現在」への展開においてシェリングが挫折していることは指摘されているが、この意味をどのように理解するかはペーツやジジェクの指摘を踏まえて今後検討を要する課題であると言えるだろう。

次いで仏訳書である。すでに述べたように三つある。

- ⑩ F.W. Schelling, *Les Âges du monde suivis de Les Divinité de samothrace*, traduction de S. Jankélévitch, Paris: Editions Montaigne, 1949.
- ⑪ Schelling, *Les Âges du Monde, versions Premières 1811 et 1813*. Traduction de Bruno Vancamp. Préface de Marc Richier, Editions OUSIA, 1988.
- ⑫ Schelling, *Les Âges du Monde. Fragments dans les premières de 1811 et 1813* editées par Manfred Schröter, traduit par Pascal David, Puf, 1992(2005)

ジャンケレヴィッチの訳は戦後すぐのものであるが、「サモトラケの神々」の翻訳を加えて、現行の Weltalter の理解に近いものである。⑪は、リシエの 30 ページ程度の序文が付けられており、この序文は Weltalter の解釈であり、「残虐と形而上学的ユートピア」という題目が付けられている。これも、シュレーターが明るみに出した二つの印刷稿の翻訳である。また⑫も、4 部構成であり、第 1 部、第 2 部がシュレーター版遺稿巻の第 1 印刷稿、第 2 印刷稿のフランス語訳であるが、それに加えて、第 3 部、第 4 部で、断片の収録がなされ、Weltalter の分析がなされ、Weltalter の理念の解明がなされている。したがって、仏訳は⑩、⑪、⑫と充実した分析が行われており、研究の蓄積がうかがわれる。

なお、1 つ私は未見なのであるが、正確に報告できないけれども、次のものも Weltalter にかんする翻訳を含んでいるようである。

- ⑬ Pau, Thomas(translated), *Idealism and the Endgame of Theory: Three Essays by F. W. J. Schelling*, New York:Suny press, 1994.

²² Zizek[1997], 3f.

3) 刊行に即した研究の状況

次に、研究の現状を研究書にそくして検討しておきたい。

まず、第1期である。3つの草稿がそろう、それを対象として研究が促された時期である。この時期の研究としては3人の研究者によるものが挙げられる。

① Benz, Ernst, *Schelling, Werden und Wirken seines Denkens*, 1955

ベンツの研究はまさにスウェーデンの神秘思想家スウェーデンボリとのつながりを明らかにしたものである。このスウェーデンボリはすでにカントが「視霊者の夢」において扱っているわけで、その影響がシェリングにあることを解明する。ベンツはフランツ・バーダーやルドルフ・オットーの研究を行っており、そういう意味ではこのような研究については重要な仕事をなしていると言えるだろう。このような研究の方向はスウェーデンボリ研究の側からも提出されていることは注目すべきだろう²³。この影響がピエティズムを介して影響していることはまさに、次のものが明らかにする。このような研究の方向を日本では、中井章子氏が研究していることも忘れてはならない。

② Habermas, Jürgen, *Das Absolute und die Geschichte. Von der Zwiespältigkeit in Schellings Denken*, 1954.

ハーバーマスのこの本書は、彼の学位論文であり、タイプ印刷し、製本されたものである。これは本としては刊行されていない。彼は本書では、マルクス主義の動向を解析するところから始め、シェリングの全体を視野に入れて分析する。そして、「ピエティスムス」との関連を重視し、後期に向かう議論を整理している。その中心章はまさに *Weltalter* を扱っている。彼はさらに、『理論と実践』の中にシェリング論を収録し、また『哲学的プロフィール』には、エルンスト・ブロッホ論を「マルクス主義的シェリング」と呼んで執筆している。そして、『理論と実践』は、初め副題の「社会哲学論集」の名前で刊行され、その後「理論と実践」の名前で未来社から刊行されている。この論文はまさに「収縮」の概念を中心に扱い、その過去から現在への転換を問題化している。この新装版が同じ未来社から1999年に刊行されている。

③ Wieland, Wolfgang, *Schellings Lehre von der Zeit. Grundlage und Voraussetzungen der Weltalterphilosophie*, Heidelberg: Carl Winter, 1956.

この論文は極めて冷静にテキスト分析を行っている。「時間」に注目して論じたのも彼が最初ではないかと思われる。

この3つがまさに第1期の研究の方向を占めるものであるが、まさにこれらの研究を受けて

²³ Horn, Friedmann, *Schelling & Swedenborg: Mysticism and German Idealism (Swedenborg Studies)*, Swedenborg Foundation, 1998.

前述のヴァルター・シュルツの研究があることは留意されたい。

第2期は、ホグレーベおよび、フランクの研究に代表される。くわえて、この時期にはランフランコーニの研究²⁴がある。フランクの研究はすでに言及したが、ここではホグレーベの仕事については次節に回し、ランフランコーニの議論を紹介しておきたい。この書は附論として3つの Druck のそれぞれについての区分を行い(これは便利である)、簡潔な解説を付している。また最初の章で、「Weltalter とその解釈」を論じ、Weltalter の成立史と受容史を扱っている。そのうえでテキストの構造分析を行っている。この書がそういう意味では包括的な研究書といえることができるだろう。

第3期は、まさにテキストの刊行では、⑥と⑦以後の研究ということになるだろう。この時期はまさに Gabriel の研究が代表するのではないかと思われる。そしてこれは現在に直接継続しており、われわれもまたこの段階で議論を展開することが必要だろうと思われる。とりわけ、この場合に、以下で紹介するけれども、ガブリエルの研究とその前提であるホグレーベの研究の継承が重要であり、またブレーメンの研究者たちの仕事も注目すべきであるだろうと思われる。

いずれにせよ、Weltalter にかんしては、資料的には今日ほぼ出そろったと思われるのであり、それらの読解に基づく研究の展開が重要になってくるだろう。

3. マルクス・ガブリエルの研究－ホグレーベの継承者としての

まさに、ガブリエルはホグレーベの後継者として 2009 年以来ボン大学の教授として登場した。彼は 1980 年生まれであり、ドイツで最も若い教授であるという。彼はシェリング研究によって哲学的とラーニングを受け、彼はまさに分析哲学との対決という課題を担って登場した。それは、まさに本別冊に掲載したガブリエルの第1の論文はそれを示している。

1) 分析哲学との対決とシェリング研究

ホグレーベは、まさに『述定存在論と発生』²⁵において、Weltalter を対象とする。ガブリエ

²⁴ Lanfranchi, Aldo, *Krisis. Eine Lektüre der „Weltalter“-Texte F.W.J.Schellings*, Stuttgart-Bad Cannstatt: frommann-holzboog, 1992

²⁵ Hogrebe, Wolfram, *Prädikation und Genese. Metaphysik als Fundamentalheuristik im Ausgang von Schellings >>Die Weltalter<<*, F.a.M:Suhrkamp, 1989.この Prädikation を、本別冊に納められた小野の訳では『述定』と訳しているが、ここではあえて『述定存在論』と訳している。ホグレーベは『述定』は分析哲学の用語であるが、それを使用して分析哲学に対決しながら、存在論的な独自のシェリング解釈を展開しているからである。それで彼のこの存在論的主張を「述定存在論」としている。

ルは、この仕事を「Weltalter の新機軸を開く解釈」と高く評価する。以下、ガブリエルにしたがって²⁶、紹介する。ホグレーベは、「述語的回転」について語るが、これは意識一般にたいする存在論的構造を前提し、「判断」の方向へと歪曲されざるを得ないという。彼の解釈はまさに、あらゆる存在者の基質が問われるとき、3つの傾向をシェリングは確定することになる。第1の方向は、何ものかが存在するとき、この何ものかを指す「代名詞的存在」がある。第2に、「何ものかであって他のものではない」ためには、何かあるものの特性を持たねばならず、「述語的存在」を持たねばならない。第3に、「代名詞的存在」の個別性を「述語的存在」の普遍性と媒介するためには、第3者を必要とし、これが「前置詞的存在」である。だから、「何であるかが一般に立てることができる」ためには、つねにすでに確立された「前置詞的空間」として存在しなければならない。ガブリエルによれば、このホグレーベの議論は後期シェリングのポテンツ論によって豊かにされる。

このホグレーベの仕事から出発したのが、ダニエル・ゾルベルガー²⁷である。ゾルベルガーは「消極哲学」と「積極哲学」の再構成を目指している。「消極哲学」は絶対的端緒にたいする探求であり、積極哲学は現実性の知性的性格を問い、「知性性」において我々が事実的に生きていることを主張することになる。ガブリエルはゾルベルガーの議論が「シェリングの宗教史の試みを理念の実現の経過を跡づける試み、すなわちアプリアリなものの経験論を跡づける試み」として見ていると指摘する。そして、ガブリエルはゾルベルガーの研究を次のように評価している。

「シェリング後期哲学のゾルベルガーの解釈は認識論の一面性についてのホグレーベの証明を適用する際に体系的に重要なシェリングの潜勢力を示している。ここで私の見解ではまだ汲みつくされない源泉がシェリングのヘーゲル批判をめぐる議論には存している。すなわち、最近ヘーゲルが認識論者として再発見されたことである」²⁸。

この見解は、ジープらの「ヘーゲルの遺産」の議論を前提し、そこでの認識論者ヘーゲルをめぐる論争を前提し、「認識論から存在論へ」の転換が、まさにドイツ観念論共通の問題であるところに、シェリングーヘーゲルの対決を見ることになる。

ホグレーベと同様に分析哲学との対決を極めて強く意識しているのがマンフレート・フラン

²⁶ Gabriel[2005],S.293.

²⁷ Daniel Sollberger, *Metaphysik und Invention*, Koenigshausen & Neumann,1999.

²⁸ Gabriel[2005]ibid.

クである。彼の議論にも簡単に触れておきたい。端的に『自己意識と自己認識』²⁹を挙げることができよう。これは副題に「主観性の分析哲学についての諸論文」という題が付されている。「自己認識は根源的現象ではなく、自己意識を前提する」というテーゼに基づき、「自己意識の反省構造」が自己認識であるとし、すでに『存在の欠如』の第2版で付されたサトルを前提して議論する。フランクの本書の第2章の第1番目の論文は文字通り、「言語分析と自己意識のネオ構造主義的理論」という題目を持っている。「グスタフ・ベリマンによってそのように名づけられた〈言語論的転回〉の後に我々は意識哲学への転回を体験している。こうして安逸な図式もまた動揺している。この図式によれば、ヨーロッパ哲学の進歩が存在論から意識哲学を経て言語哲学への思惟の経過として反映されていた」(159f.)。このような現代哲学の認識に基づき、ディーター・ヘンリッヒの「主観性理論」が決定的な代弁者であることを指示する。それにたいして、ネオ構造主義と言語分析の結合した方向における主観性理論が「自己意識」と「自己認識」を等しいものと見ることによって、「心的現象が非身体的現象である」、「心的現象は身体的領域において因果的結果を持っている」、「身体的現象は因果的に閉じられている」という3つのテーゼでまとめられる「一つの問題」にぶつかることを指摘する。そしてこのような方向の議論をドイツ語圏ではハーバーマスも共有し、トゥーゲントハットが代表することを指摘する。フランクは、問題が繫辞 (Prädikat) によって存在者がどのように表現されるかであるとし、自己意識理論をホグラーベが主張する「述語的存在」と結合する。そしてそこから分析的主観性理論を批判することになる。

2) ガブリエルのシェリング研究

それではガブリエルのシェリング研究はどのような方向に向かうのか。彼の多産な著作はまさに第1に、懐疑主義の問題であり、古代と近代のそれを扱う幅広い研究を行っている³⁰。第2に、認識論問題を取り扱っている。この方向もまた認識論における懐疑主義の問題を重視し、存在論との交差において認識論を扱っている³¹。そして、分析哲学を強く意識して、それと対決しながら、ドイツ観念論の可能性を浮かび上がらせる方向を目指している。シェリング研究

²⁹ Frank, Manfred, *Selbstbewußtsein und Selbsterkenntnis. Essays zur analytischen Philosophie der Subjektivität*, Stuttgart: Philipp Reclam jun., 1991.

³⁰ Gabriel, Markus, *Skeptizismus und Idealismus in der Antike*, Berlin: Suhrkamp, 2009.; ders., *Antike und moderne Skepsis zur Einführung*, 2008.

³¹ Gabriel, Markus, *Die Erkenntnis der Welt: Eine Einführung in die Erkenntnistheorie*, Freiburg: Verlag Karl Alber, 2012.; ders., *An den Grenzen der Erkenntnistheorie: Die notwendige Endlichkeit des objektiven Wissens als Lektion des Skeptizismus*, Freiburg: Verlag Karl Alber, 2014.

はまさにガブリエルのこの方向の出発点にあたることになる。

彼のシェリング研究は、後期シェリングを、「神話の哲学」を対象としており³²、彼の問題意識は次のように言われている。

「世界と何であるか」、この問題がシェリングを初期の営み以来緊密に取り組ませ、ヨーロッパ形而上学の全伝統と対決することに動かしてきた問題であるとガブリエルは捉える。そして、それは今日では、ヨーロッパの形而上学において *philosophia perennis* の根本状態に帰属しているものから独立した問題であり、現実的である。ヨーロッパ形而上学の古典的諸問題にたいするシェリングの回答を詳細に追求することが豊かな展望を与える企てである。

ガブリエルは、このように主張し、シェリングの哲学的思惟がヨーロッパの形而上学の中心的で思弁的問いの中に立っている。だから、後期の「神話の哲学」もまた思弁哲学の包括的な体系の一部だと主張する。

このような方向は、本稿で最初にガブリエルのシュルツの研究を紹介したが、まさにシュルツの研究の方向を受け継いでいると言えるだろう。

そのうえで、シェリングの後期哲学が存在者の全体を総体性として把握する絶対的観念論の制限をも主張していることを指摘し、「シェリングの神話の哲学はこうして観念論の限界がシェリング後期哲学において結局乗り越えられることができないかどうか、どの程度までそうかという問題が、意義があり、差し迫っているほど広く思弁哲学自身の限界に衝突する自然的思惟の重要な証拠である」(3)とする。そのために、シェリングの神話の哲学がガブリエルの研究の対象として選択されることになる。ここで、シェリングの試みにおける自己発生という意識形式を重視することになる。

後期シェリングはまさにすでに述べたように、実存主義的研究が高く評価したわけであるが、ガブリエルはこれらの研究を視野に入れて、議論の方向を明らかにしようとしている³³。ガブリエルのこのシェリング研究はまさに先行研究を批判的に受容しつつ、包括的に取り上げている。そのうえで、先行研究の強さに引きづられることなく、思弁哲学のシェリングの展開という線貫徹する。この理解は重要である。「ティマイオス評釈」以来の「超越論哲学」の世界の全体へと転回していく姿をシェリングの哲学的営みにみ、そこから現在の分析哲学との対決という課題をも了解している。きわめて強靱な哲学的営みを感じさせる。

³² Gabriel, Markus, *Der Mensch im Mythos. Untersuchungen über Ontologie, Anthropologie und Selbstbewußtseinsgeschichte in Schellings Philosophie der Mythologie*, Berlin&New York: Walter de Gruyter, 2006.以下では、本書からの引用にさいして、ページ数だけを指示する。

³³ チリエット (Xavier Tilliette) のシュルツ批判を、とりわけシェリングとヘーゲルの対自にたいする異論にガブリエルが注目しているのは面白い。だがこの検討は本稿では視野の外にしている。

くわえて、ガブリエルの本書以後の研究の展開もまた本書にすべてがあると思われる。彼は、まさにパルメニデス以来の「存在と思惟の統一」を問題にし、それをプラトンの「パンテオース・オン」を問題にし、シェリングがこれを神のうちに見出すことを指摘する。まさに古代の理解を、カントの「全体としての実在(omnitudo realitas)」=「認識可能なものすべての総括」と結合して、シェリングがカントの超越論哲学の線上にまさに古代の存在論を復活させる姿を浮かび上がらせる。

このようなガブリエルにとって、まさに第2の認識論の試みが登場してくるのは当然のことだろう。かれは『世界の認識』において次のような議論を展開する。

第1章で彼は「基礎と方法論」という題目をつけ、その第1節で、分析的方法と総合的方法という題目をつけ、ヴィルフリート・セラーズらの分析哲学の方向を視野に入れる。ブランダム、マグダウエルらのヘーゲル研究の試みが当然彼の念頭に入っている。そして、前掲のホグレーベの作品を中心に、ホグレーベの他の作品を含めて検討の対象にしている。そのうえで、彼はシェリングの初期以来の課題を確認することになる方法的検討としてプラトンの議論を分析哲学的な基準に対置する。対置するプラトンに議論は、まさに先に紹介した「プラトン評釈」を前提し、かつソクラテスの「夢」と「ロゴス」の3つの意味を明らかにして、そこから分析的認識論と対峙する。第2章はまさに「懐疑主義の諸形態」を問題にして分析哲学の限界を指摘し、「コンテクスチュアリズム」を主張することになる。だが、この「コンテクスチュアリズム」自身はすでに至る所で議論されていることがあり、この議論において、ガブリエルの研究が独自の積極性をどう展開するかが期待されるところである。

おわりに

ガブリエルの議論が「後期シェリング」とりわけ、神話の哲学の焦点を合わせながら、シェリングの全体を視野に入れる研究となっている。この試みは、まさに筆者が最初に示した研究史上のシェリング像の分裂という事態に対する明確なアンチ・テーゼという意味を持っていると言えるだろう。とりわけ最初期のプラトン受容を重視することによってガブリエルは前期と後期の分裂を架橋する。そしてこの架橋によって、シェリングの全体の一貫した理解がまさにガブリエルにとっては、シェリングの哲学的営みがそれ自身として極めて現代的であることを主張する根拠となる。このシェリング研究の後、かれは「懐疑主義」の研究を深く追求し、その上で、認識論問題を、存在論を媒介にして展開する。そして分析哲学の介入を積極的に受け止めながら、それに対峙していく彼のその後の、現在の哲学的営みだと言えるだろう。そして、研究史的に見れば、ホグレーベ、ガブリエルと流れる線は、シュルツ、フランク、ヤンケらの研究の線と繋結し、ドイツ観念論全体の活性化につながる営みといえるだろう。その意味で、

論文

われわれ日本で哲学に従事する研究者にとってもきわめて刺激的な営みであると言えるだろう。

彼の明確な主張はまさに、次の2つの著作にあるようである。

Warum es nicht die Welt gibt?, Berlin: Ulstein, 2013.

Der neue Realismus, Berlin: Suhrkamp, 2014.

前者は、ガブリエルの近著であり、これは眼を通すことができる。後者はガブリエルの編著であるが、「新実在論」という題目は、まさにフランクらも執筆している。また最近同じ題目の議論が生じていることもあり、新たな潮流の形成を予感させる。2014 年秋の刊行が予告されているところであり、従って筆者もまだ眼を通すことができていないが、ガブリエルを含め多数の論者が非常に面白い議論を展開してくれるのではないかと期待している。今後の活動が楽しいな哲学者であることは間違いないであろう。